
先生と僕

あんみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先生と僕

【Nコード】

N5204C

【作者名】

あんみ

【あらすじ】

僕はどこにでもいる、普通の中学3年生。受験受験と先生たちは騒ぐけど、正直あんまり僕らには実感がない。そんな、けだるい10月。でも、一生忘れない10月。登録して初めての作品です。拙いところもたくさんありますが、よろしく願います。

第1話 出会いと僕

「菅谷くんね…。もう覚えた。絶対忘れない」

しゃがみこんで、涙目で僕を見上げて、うらめしそうに、先生はそう言った。

僕は菅谷遼太。ごく普通の中学3年生だ。

部活を夏に引退してからは、たまに顔を出したりしながら、なんとなく受験勉強の日々。

だけど、正直言って高校なんてまだまだわかんない。

なんとなくこの辺かなあ、なんて意識はあるけど、はっきりとした目標なんてもないし。

そういうもんなんだろう。そういうもんなんだろう。

そんななんとなくけだるげな10月の日々を、友達と一緒にバカやりながらすごしていた、そんな時。

教育実習生が、3年1組にやってきた。

「はじめまして、今日から教育実習に来ました秋名つぐみです。1ヶ月間っていう短い間なんです、よろしくお願いします」
少し高めの声でそう言って、秋名先生はぺこりと頭を下げた。

…秋名って名字、珍しいな。つぐみっていう名前も。

だけど、この人に合ってる気がする。

少し茶色がかった細い髪に、白い肌、きれいな茶色の大きい目。うすいピンクの唇。

20をこえた大人のくせに、表情がどこか幼げに見える。

…なんか、きれいだけどこかわい。

その辺の男はほっとかないような感じに見える。

それに。

秋名先生はなんだか、きらきらしていた。

瞳、髪の毛、すべてがきらきらしているように見えた。

それで僕は思った。

「あ、この人ははつきりとした目標があるんだなあ」

そんなときは、急に自分がどんよりして見えるもんだ。

困った。

初日はそれっきり、先生と会うことはなかった。

…と、思ったんだけど。

「あれっ？まだ残ってたの？」

今日中に提出する予定だった数学のプリントを、拓と一緒にやってたとき。

秋名先生が教室に入ってきたのだった。

「もう6時だよ？早く帰んなよ」

「やー、今日提出のプリント残ってんすよ」

拓はとても気さくなやつだ。今日はじめて会ったばかりの先生にもホイホイ話しかけていく。

「せんせー、いくつつすか？」

「いくつに見える？」

「28」

「……………そうそう、28」

「うそうそ。20とかつしょ？」

「そうそう、20歳」

「あれ、でも大学3年だったら…21？」

「誕生日きてないだけ。早生まれだからね」

「彼氏は？」

「彼氏ー？いないいない、そんなもん」

「まじで？」

僕の口からはじめて出たのは、彼氏がいなくて言った先生へ、だった。

先生は僕のほうを見てうん、いないんだよねーと笑い、拓はその後ろでにやつと笑った。

「せんせー、こいつ朝からせんせーのことかわいいかわいい言ってたから気ーつけた方がいっすよ」

「あらっ、ほんとに？照れるわー」そういつて先生はまた笑った。

僕は耳が熱くなるのを感じながら、んなこと言っただろと拓を殴り、

先生に向かってすいませんコイツバカだから、と頭を下げ、拓を引っ張ってそそくさと教室を出た。

いやでも、彼氏がないのは意外だった。

だって、やっぱり先生は僕の目から見てかわいかったから。

…や、だからって拓が言っみたいに朝からかわいいかawaii言ってたわけでは、決してないけど。

秋は、暗くなるのがとても早い。

6時半頃になるともう真っ暗になってしまっていた。

まあ、だけど僕らは男だから、暗いからどうってこともなくて。
拓とは校門を出た後は家は逆方向だから、しばらく校門の前でくだらないことをしゃべってた。
すると。

「あ、せんせーだ」

真つ暗な闇の中、職員玄関から出てきた秋名先生。

それを見た瞬間、拓と僕の間には同時にいたずら心が芽生えた。

息を殺し、校門の前でしゃがんで待つ。

姿勢よく、ちよつと疲れた表情でまっすぐ歩いてくる先生。

カツ カツ カツ カツ

今だっ

「わっ！！」

「きゃああっ！！」

慌てふためき、へなへなと座り込み、顔を覆う先生。

やべっ、やりすぎたか！？

「あははははははっ」

拓のバカは笑い転げている。

「ご、ごめんせんせ…大丈夫？」

とりあえず謝って、先生の肩に手を置くと。

先生は僕の胸をぐつとつかんで引き寄せ、名札を確認した。

「菅谷くんね…。もう覚えた。絶対忘れない」

しゃがみこんで、涙目で僕を見上げて、うらめしそくに、先生はそう言った。

「ちょ、俺だけ!？」

「…と思う間に、先生はまだ笑い転げている拓のほうにすたすた歩いていって、僕にやったように胸をつかんで引き寄せた。」

「水島くんね。あんたも絶対忘れない」

かくして、僕たち二人は秋名先生にとって、最初に名前を覚えた記念すべき生徒となったのだった。

「…そんなびつくりしたのかな？」

「…うん、多分」

第2話 予感？と僕

僕は、クラスの中で一番に来ることが多い。

みんな結構だらしないのか何なんだかわかんないけど、チャイムギリギリに来るやつが多い。

だけど僕はあんまり朝あわただしいのは好きじゃないし、朝の空が結構好きだから、

はやく起きてゆっくり学校に来る。で、何をするわけでもなくぼけーっとしてる。

最近は、結構冷えるようになってきた。

「あつ、おはよう菅谷くん」

「あー、おはよーございます」

廊下を歩いていると、教科書やらプリントやらファイルやら、やたらといろいろ抱えた秋名先生に会った。

「あああ、やばいやばいやばいやばい」

見ると、いろんなものがずるずる落ちそうになってて、先生がものすごくあわてている。

僕はあわてて駆け寄って、落ちそうになってるものを下から支えた。

「ごめんごめん、ありがとう」

「一気にいろいろ持つからですよ」

「…だってー…めんどくさいじゃない、行ったり来たりするの」

「ははっ…先生って、たまに先生っぽくないですよね」

「ちよっとな、どういう意味？」

「先生としてはまだまってコトですかね？」

「…！！だって、当たり前だもん…実習生だもん…」

ちょっと冗談を言うだけで、真っ赤になってしどろもどろになってしまう。

そういうトコが先生っぽくないんですって。

…って言いかけて、やめた。先生の荷物を半分持つて、今は実習生の控え室になっている少人数指導室まで行く。

「ありがとー、助かった」

「先生今日うちのクラスで授業するんですか？」

最近時間割変更やらなんやらで国語がよくつぶれていた。

だから、ほかのクラスのやつはもう秋名先生の授業を受けていたけど、僕らはまだだったのだ。

「うん。なんか、みんなのことちょっと知ってる分だけすごい緊張する…」

「そういうもんですか？何とかなりますって」

「そう？じゃあ私が質問したら真っ先に手あげて答えて」

「あ、無理です。国語苦手なんです」

ふくれっ面になる先生を見て、僕の顔は自然と笑顔になる。

…かわいい。

「何笑ってんのよ。絶対当ててやるからね」

「だからイヤですって」

秋名先生は、国語の担当だった。

そして、秋名先生を指導する、僕達の本当の国語の先生は、学校の嫌われ者だった。…国語の先生っていうのは、どうしてあんなにむかつく人が多いのだろう。

谷中、英子。

どっかの学校から今年来たくせにやたらと態度がでかく、

細かいところに目をつけてちくちくちく嫌味を言い、僕らのことなんか何にも知らないくせに何でもわかってるような顔してる。

みんなと同じように、僕も谷中先生が苦手で嫌いな生徒の一人だった。

だから、3年1組ではしきりに、

「秋名先生かわいいそう…」

だの、

「秋名先生まであんな嫌味っぽくなったらどうする？」だのささやかれていた。

そして、秋名先生の初授業。

ものつすごく、おもしろかった。

そして、苦手な僕にもわかりやすかった。

なんか、教科書をパラパラと読んだころは「げ、こんなのやんの？」みたいな、面白くなさそうな単元だと思ったんだけど。

全然、そんなことなかった。

初めは少し緊張気味だった秋名先生だけど、拓とかアツが茶化したりなんかしてるおかげで、

授業の半分以上をすぎると先生はいつもの調子でニコニコしながら授業をしてた。

ふと後ろを見ると、谷中先生が、

面白くなさそうな顔で何かにチェックをつけてる。

うーん…。これから秋名先生は谷中先生にいびられてしまうのだろ

うか。

先生、頑張つて。

僕は意味もなくシャーペンをぐつと握り締めて、
丁寧に板書された文字をきつたない字でノートに写し取った。

「しかし、りょーたが年上好みとはなあ」
「あ？」

昼休み、椅子に後ろ向きに座って僕の顔を覗き込み、にやーっと笑うバカふたり。

「好きなんだろ？せんせーのことが」

「…お前らまだそんなこと言つてんの？」

「だってお前、谷中せんせーのときと秋名せんせーのときと、授業の身の入り方ぜんぜん違うぞ」

「アツだつてすげー集中してんじゃん。てかみんなそうじゃね？」

「まあ、そりゃそうなんだけどさあ」

確かに、谷中先生の授業はつまらないし、嫌味は言われてむかつくし、受ける気なんか全くしなくて。

だけど、秋名先生の授業はおもしろかったし、変なことδειいちいち怒らないから集中しやすいし。

それはみんな同じだろう。

だけど拓とアツは、そんなんじゃないで、僕が秋名先生を気に入ってるからだつて、そう言いたいんだ。

この、バカども。

自慢じゃないんだけど、僕は、中3にしたら結構落ち着いているらしい。

自分ではぜんぜんそんな風に思わないんだけど、童顔のくせに大人っぽいらしい。

…顔のわりに老けてるってことなんだろうか。

いやいや、多分小さい頃からずっと拓やアツと一緒にいるからだろう。そういうことにしよう。

拓は、水島拓己って言って、陸上部のエースだった。引退してからも部活にたまに顔を出している。アツは、斐川敦也って言って、バスケ部。アツもかなり大きな戦力だった。

ふたりとも運動はできて、部活ではかなりすごいやつらなのに、なんだかバカだし能天気だしイタズラ好きなのだ。

そんなふたりの、度が過ぎそうなイタズラをいつもいつも小さい頃から止める役をやらされて、僕の人格が出来上がったんだと思う。バカを止めるためには、もう少しぐらい落ち着いてるやつがいらないといけないから。

剣道部に所属してたころから、ちょこちょくと女の子に何か言われたりすることも、なかったわけではない。だけど。

別に女の子とも付き合うこともなく、これまですごしてきたわけで好きな子も別に…いなかったし。

中3の今までそんなだったから、このふたりは僕が秋名先生を好きになったっていう風にしたいんだろう。

「そりゃ、確かにかわいいと思うよ。秋名先生は」

「おっ！やっぱり！」

「けどさあ、お前ら。相手は先生だぞ？」

「実際は大学生じゃん」

「いやいや、そういう問題じゃねーよ。次元が違っただろ。中学生と大学生じゃ」

「乗り越えろ！そのぐらい」

「バカ」

…だけど、実際、ふたりが言いたいこともわからなくはない。自分の言葉一つで、くるくる表情が変わる先生の顔を見たり、授業中とかに目が合って、先生にふんわり微笑まれたりすると、なんだかどうしようもなくすぐったくなってしまうのも、事実なんだ。

秋名先生に会って、まだ1週間しかたってないのに。

拓やアツは、ものすごいバカだと思う。

だけど、僕も負けないぐらいにバカなんじゃないだろうか。

第3話 自覚と僕

最近、学校が楽しい。

3年1組の32人は、みんなそう思っているんじゃないかと思う。

「つと、今日は45分授業ですね。それで、1時間目に歯科検診があるからみんな遅れないようにしましょう」

秋名先生の、いつまでたっても少しも慣れる様子がない朝の連絡ももう慣れた。

その後の、大事なところだけはしゃべる担任の倉沢先生の話も。

みんながとも生き生きしてるのは、秋名先生がいつも楽しそうにしゃべるからだと思う。

あ、朝の会の連絡は緊張しててへたくそだけど。

秋名先生は給食を食べるのが遅い。

20分あれば給食ぐらい食べれるだろうに、いつも時計を気にしながら焦って食べて、たまにむせたりしてる。

しゃべりながら食べればいいのに、しゃべるときは絶対手を止めちゃうから、さらに遅くなってる。

秋名先生の授業はとても面白い。

朝の会はたどたどしいくせに、授業はなぜかリラックスしてる。：ように見える。

でも時々「しまった！」みたいな顔をするから、多分何もかもうまくいってるわけではないのだろう。

誰かが先生の質問の答えをつぶやくと、ものつすごくうれしそうな顔をする。

僕も無意識のうちに答えをつぶやいたとき、それが実はとても大事な部分だったらしくて、

聞こえてるくせに何回も「え？」と聞き返されて、みんなが笑う中大きな声で発表させられてしまった。

…あのときの先生の、いたずらをやり遂げた！みたいな笑顔は絶対忘れない。

秋名先生が実習に来てから3週間。こんなに生徒と仲良くなった実習生はこれまでにいただろうか。

授業もすごく面白いし。正直、谷中先生の授業より断然わかりやすい。

これがいつかは、あの谷中先生の授業に戻ってしまうと思うとやりきれない思いでいっぱいになる。

国語が谷中先生の授業に戻るとき。

…それは、秋名先生の実習が終わるときだ。

あと、1週間、か。

そんなある日、家に帰ってご飯を食べてから、僕は忘れ物をしたことに気付いた。

理科のワーク。明日提出で、理科の渡辺先生は提出物にとっても厳しい。

やばいぞ、これ。

時間は6時45分。まだ学校あいてるかな？

僕は私服のまま自転車に乗って、真っ暗になってしまった道の上、必死にペダルをこいだ。

10分ぐらい走ると、学校が見えてきた。

…あれ？1組の教室、電気がついてる。

誰かいんのかな？こんな時間に。倉沢先生かな？

意味もなく足音を忍ばせて、3階の教室に向かう。

僕がそこで見たものは。

うつむいて、教科書の上にペンを走らせる秋名先生。

時折、鼻をすすする音。

黒板に連なるのは、僕らがまだやっていないところの授業をまとめた白い文字。

僕は声をかけることが出来なかった。

先生はまったく僕に気付く様子はなく、また顔を上げて、手に持った紙を見ながら黒板に字を書き出す。

今まで見たことのないくらい、真剣な表情。

黒板がいつぱいになったころ、大きなため息をついて。

「えっ！？」

…入り口で立ち尽くしていた僕に気付いた。

「あっ、あの、俺、忘れ物しちゃって…」

意味もなく僕は焦り、あわてて教室に入る。端っこの机にガンツと足をぶつける。

「いでっ」

「今とりに来たの？ずっとそこいたの？ぜんぜん気付かなかった…」

ものすごくびっくりした顔をして、秋名先生は僕を見た。

目が、赤い…

…先生？

…いや、聞いちゃダメだ。

「すみません、すぐ出るんで」
「ううん、謝ることないよ。気づけて帰ってね」

…でも。

「あ、先生」

「ん？」

僕は精一杯笑って、ずっと言いたかったし、みんなも思ってることを言った。

「俺ね、いつも先生の授業めっちゃおもしろいと思って聞いてるんですよ」

……

…あれ？

僕、

何か変なコト言った？

「あの、せんせ…」

「……あれっ？」

茶色い目からぼろぼろと、涙がこぼれる。

先生はそんな自分にびっくりしたみたいだった。

「ごめんごめん、なんでもない」

先生はすぐに涙をふいて、にっこり笑った。

目が赤いこと以外は、いつもの秋名先生だ。

「うれしいと言ってくれるねー、菅谷くんってば」

「や、みんなそう思ってますよ。谷中先生の授業より百億倍いいですよ」

「ほんとに！？うれしい、ありがとう！」

いつもの秋名先生だ。目が赤いこと以外は。

…目が赤い人には、気づいてないことにしよう。

「ところで何忘れたの？」

「あー、理科のワークです。明日出すんすよ」

「明日出すのに忘れちゃったんだ」

「はい」

「おバカだなあ」

「ほんとと、こういう時まじテンション下がりますよね」

「わかるわかる。私だったら嫌になっちゃって取りになんか来ないよ。菅谷くんえらいね」

「いや、理科じゃなかったら俺だって取りに来ないですよ」

「提出厳しいんだ？理科」

「もー、谷中先生レベルっすよ」

「あはは」

「そーだ、先生は谷中先生どう思います？」

「なに、どうって？」

「ものっすごい嫌われてるじゃないですか、生徒に」

「でも、悪い人じゃないでしょ？」

「悪い人ですよ！悪人ですよ」

「もっ、そんなことないってば」

「でもマジありえないんですよ？なんかこないだとか…」

谷中先生の愚痴が止まらなくなった僕と、それを制す秋名先生のやりとり。

…ほかに、誰と誰が付き合ってるのか。クラスの中の間人関係。拓や、アツのバカないたずら。

僕たちの話は続いた。話してるうちに、秋名先生の目からは赤みが引いてきて。

いつもと微妙に違う秋名先生の笑顔は、いつもと全然変わらない秋名先生の笑顔に戻ってきて。

僕は、何よりもそれが、本当に本当にうれしかった。

くだらない話をしてたら、いつの間にか時間がすぎてて。

僕は8時半を過ぎてやっと、自分が帰らないといけないことに気付いた。

「げ、もう8時半!？」

「あつ、ごめん!話に夢中になってた」先生もあわてて黒板を消し始める。

僕はそれを手伝ってきれいにしてから、さよならを言って学校を出た。

僕は意味もなく、どんどんペダルをこいでスピードを出す。

自転車のカゴに放り込まれた理科のワークがばさばさ音を立てる。

夜の風が、心地いい。

僕はきつと、ずっと忘れないんじゃないだろうか。

秋名先生の、真剣な横顔。

秋名先生の、思わずこぼした涙。

秋名先生の、笑顔の中の潤んだ赤い目。

「話に夢中になってた」

秋名先生の、なにげなく紡いだ言葉。

親友ふたりの、バカな言葉がよみがえる。

「好きなんだろ？ せんせーのことが」

…拓とアツが言ったとおりになってしまった。

やっぱり僕は、ものつすごいバカだ。

第4話 迷いと僕

楽しそうに話す明るい笑顔を見るだけで、僕だけでなく拓も、アツも、ほかのやつも。

すごく元気が出る。みんなが明るくなる。

いつもいつも、秋名先生の周りには、誰かの笑顔がある。

すごい、と思う。

ほかの誰にもまねできない力だと思う。

…そういう、人を惹きつける力がある秋名先生には。

絶対、教師になって欲しい。

もし、秋名先生のような人に教わることができるなら、そいつは本当に幸せ者だろう。

そして、僕たちもその幸せ者のひとりだ。

その日の3時間目は学活で、自習と二者面談だった。

誰の案だか知らないけど、あと3日で実習が終わる秋名先生へ、メッセージを送ろうっていうことで色紙が回ってきた。

…う。なんて書くう。

みんな、先生の授業は面白かったとか、わかりやすかったとか、楽しかったとか、いろいろ書いてる。

僕はバカみただけで、特に目を引くメッセージにできなかった。

…だけど、僕はもともと国語は苦手だから。そんないい言葉なんか思いつかなくて。

「今までの実習生の中で一番よかったです。授業もかなりおもしろかったです。」

国語はあんまり好きじゃなかったけど、先生のおかげで少し好きになれた気がします。

1ヶ月間、本当にありがとうございました。

菅谷遼太

隣の綾瀬が持ってたバカみたいに目立つ蛍光ピンクで、ありきたりの言葉を素直につづるしかなかった。

「菅谷さあ、何でそんな色わざわざ使うの？」

「いや、変な色だから使いたくなっただけ」

「なにそれ」

綾瀬はそう言って笑いながら僕からペンを受け取ったけど、文がヘタクソでも見てほしい…みたいな気持ちで僕が蛍光ピンクなんか使ったことは、絶対わからないだろう。

秋名先生は何も知らず、

ただたどしく朝の連絡をし、どこかのクラスで授業をし、あせりながら給食を食べ、またほかのクラスで授業。

いつもどおり、何も変わらず。忙しそうに、楽しそうに。

まるで、この学校にいつまでもいるかのように。

…わかってる。先生と生徒が、そういう関係になるのは絶対ありえないってコト。

ましてや教育実習生という立場はこの学校とは本来関係ない立場だから、

実習が終わったなら生徒と個人的な連絡は取っちゃいけないコト。わかってるんだ。

中学3年にして、初めて人を好きになった。

もしかしたら初めてじゃないのかもしれないけど、自覚したのはこれが初めてだ。

これは、他の人からすれば遅い方なんだろう。でも、僕にとっては初恋ってやつで。

…だけど、どうしてそれが、絶対に叶わない相手なんだろう。

もし、僕のこの気持ちを、先生に伝えたとしたら、先生はどんな顔をするのだろう。

…やっぱり、困ってしまうんだろうか。

「りょーたあ」

「あー？」

「どうすんだよ？」

僕を取り囲むバカ二人は、最近僕のことを茶化さなくなった。今だって、ほら。

なんだ、この心配そうな目は。きもちわりい…

「どうするって、何が」

「何がって、バカ。決まってるだろ」

「あと3日でせんせーいなくなっちゃうぞ？」

拓とアツが言いたいことはわかってる。

秋名先生に気持ちを伝えるのか伝えないのか、どっちなんだと。

アツは、好きな女の子…部活の後輩に告白した経験がある。

それで、見事付き合うことに成功したのだ。…ま、けっこう前の話だから、今は別れちゃってるんだけど。

拓はそういう経験はない。小6のころに好きだった子が転校してしまったからだ。

何も気にしてないみたいに振舞ってるけど、未だにその子のことが忘れられないってことを、僕は知ってる。

秋名先生のことを本気で好きになったと、この二人に言った覚えはないのに。

やっぱりわかってしまったらしい。

あーあ。そんなわかりやすかったのかな…

「…だってさあ…。絶対無理なことがわかってて、普通言っか？」

「…うーん…」

「だろ？ほら」

アツが、言われてみれば…みたいな顔して黙り込むのを見て、ほっとしたのと同時になぜか少しがっかりする。

拓はというと、拓も難しい顔で黙り込んでしまった。

「いーの、俺のことは」

「…ほんとに？いーのか？」

「うん」

そう。いいんだ。

だって、伝えたって秋名先生はきつと困ってしまうだけだから。困らせるくらいなら、迷惑をかけるくらいなら。

黙っていたほうが。

先生のあのときの、「なんでもない」って笑ったときの、潤んだ目の中には、

僕には絶対わからない苦しみが隠れていたと思う。

先生にだって苦しいことがあるのは当たり前だけど、
だけど、

先生には、困るとか、泣くとか、そういうのは似合わない。
笑っていて欲しい。

5時間目。

秋名先生の、国語の授業が始まる。

「よしっ、始めます！」

「きりーっ」

「れーい」

「ちゃくせーき」

秋名先生は今日もニコニコしている。

僕はものすごくぼけっとしていて、授業が始まってるのに教科書もノートも出さないままでいたらしい。

「ちよつとー、菅谷くん！授業始まつてるのになんで机の上に何にも出てないのよお」

「え？あつ」

白い目でにらむ先生と、あわてて教科書やノートを引っ張り出す僕と、その周りで起こる笑い。

「じゃあ菅谷くんにはものつすごく長く教科書読んでもらおつと」

「えー！？ちよつと待っててくださいよ」

「待たない！えつとねえ、99ページの3行目から101ページの最後まで！」

「長すぎですよ！」

「だって長く読んでもらうって言ったもん」

「えゝ、まじかよ……」

「教科書出してないほうが悪いもんねー、ほらっ読んで読んで！」

「あー……えーつと……」

教科書読むの苦手なのに……

だけど、いやな気持ちにならないのは、僕の前で笑ってるのが秋名先生だからだろう。谷中先生だったら自分が悪いにも関わらずマジでむかついたに決まってる。

つかえながらたどたくしく読む僕を、先生は漢字の訂正なんかをしながら根気強く待ってくれる。

やつのことで読み終わると、にっこり笑って

「頑張った！」と声をかけてくれた。

自分でもイヤになるぐらい汚い字でノートを取りながら、僕は先生の顔をちらつと見る。

僕が理科のワークをとりに行つたあとき、

痛々しいぐらいに真剣な表情で黒板に向かっていた先生。

あのとくに書いてたのと全く同じ内容を、

たまに間違えたりちよこつと補足したりしながら、ニコニコ笑って丁寧に書いている。

あ。

ふとこつちを見た先生と、目が合う。

…先生はちょっと恥ずかしそうに目をそらした。

僕の胸の中で、何か熱いものがじわりと広がる。

…あの表情の意味は、きっとこのクラスで僕だけにしかわからない。

…やっぱり。

僕のこの気持ちなんて、伝えたら絶対、先生は困ってしまふ。

先生の困る顔なんて、見たくない。

迷惑なんて、絶対かけたくない。

笑っていて欲しい。

この人には、笑っていて欲しいんだ。

第5話

決意と僕

普通1ヶ月といったらなかなか長いもんだ。けどこの1ヶ月は、とても短く感じた。

わずか1ヶ月の間で、僕の周りはかなり変化したように思える。

たとえば、夏の間はぜんぜん降らなかった雨が、1週間もずっと続いていらしたことや。

たとえば、暗くなる直前の夕焼けが、ため息が出るぐらいにきれいな金色だったことや。

たとえば、生暖かった夜の風が、ひんやりと冷たく、心地よくなったことなんか。

今までは当たり前だと思っていたことに、おおーと思ったり、いらしたり。

今までなら絶対感動しないような映画に、不覚にも涙が出そうになったり。

いつもどんよりしていた自分の心が、実はこんなに透きとおっていたものだったことを、初めて知った。

そんなことを知るきっかけをくれた人が、今日、僕の前からいなくなる。

「つぐちゃん、ずっとこの学校いてよー」

「つぐみ先生いなくなったら超さみしいんだけどー」

「うーん、ずっといたいのはやまやまんだけどねえ…」

1ヶ月の間で、秋名先生は自然と女子から下の名前で呼ばれるようになっていた。

3年1組だけでなく、ほかのクラスのやつも秋名先生のことが大好きになっていた。

1週間とか、1ヶ月とか、1年とか。

そういう単位で考えていくと、時間ってすごく長いもののように感じるけど。

1分とか、1時間とか、1日とか。

そういう単位で考えていくと、時間なんてものはどんどんどんどん過ぎていく。

あつというまに給食がおわり、もう今は昼休みだ。

…と。

昼休みになった瞬間、僕は拓に引っ張られてベランダへ来た。

なんか、今日の拓はおかしい。

ずっと難しい顔をしてる。

「りょーた、やっぱ今日言え」

「あ？何が？」

「秋名せんせーに。言わないとダメだ」

拓が、珍しく真剣な顔で僕に言う。

こいつのこんな顔見るのは久しぶりな気がする。

「だから何をだよ」

「告れつつってんの」

「ぶ…」

いきなり何を言い出すのかと思ったら。告れ、だ？

何を言っただ、こいつは。

「だからさあ…言わないって決めたの」

「だからさあ…それじゃダメなんだよ」

後ろ頭をぽりぽりかきながら、もどかしそうに拓は言う。

「だから…もう会えないってわかってんだったら、無理だろうが何だろうが絶対言わないと後悔するんだよ」

好きな子が転校しちゃったのに、結局告白できないままだった拓ならではの言葉だ。

…重みがある。

「そうだぞ、りょーた。言っちまえ」

「うつ、アツ…お前いつ来たんだよ」

「今。ってゆーか、もう俺、秋名せんせーに『今日の6時に教室に来てください』って言ってきちゃったぞ」

…

……

………は！？

「ぐっじょぶ」

「だろ」

「ぐっじょぶ、じゃねーよ！！何勝手に、おまえら…」

ぐっと親指を立て、健闘を喜び合うバカふたりをはたこうとしたその瞬間。

そのバカふたりは、二人してもものすごい睨みをきかせて僕にたたみかけた。

「いいかお前、考えてみ？相手は教育実習の大学生だぞ？」

「せんせーにはもう絶対会えないぞ？」

「連絡先も聞けないし、俺らは高校行っちゃうし」

「もし文化祭かなんかに来てくれたとしても、たぶん女子に囲まれて俺らは近づけないで終わりだぞ」

「俺らつて今までの実習生のことなんて覚えてなくね？向こうもそうかもしれないし」

「俺らのコトなんかきつと『バカなやつがいたなあ』くらいで終わりだぞ」

「せんせーが学校に来るの、今日が最後なんだぞ？」

「そんでその今日も、もう半分終わってんだぞ？」

…こいつら…言い返せないと思って何でも言いやがって。

確かに、こいつらが言ってることは全部、的を射てる。

拓がそうだったように、好きな人に気持ちを伝えられなかったっていうのは後悔するものなのかもしれない。

だけど。

…だけど、さあ。

「…けどさあ、言ったって、困らすだけじゃん。迷惑かけるだけじゃん」

ワケわかんなくなってきた、二人の目から逃れるように、僕は下を向いた。

そう。

飯に好きだと、秋名先生に伝えたとしても。

こいつらが言っただように、秋名先生は教育実習中の大学生だから。

僕は何てことない、実習先の一生徒でしかないから。

「なんだお前、そんなこと気にしてたの？」

拓があきれ果てた声を出した。

そんなことってなんだよ。

そう言うより先に、ふたりが口を開いた。

「お前今までどんだけせんせーのこと困らしたり迷惑かけたりした
と思っただよ」

「秋名せんせーはちょっとぐらいの迷惑でイヤな顔するような人か
よ？」

…こいつらは、どうしてこうテンポよくズバズバ言ってくるのだろ
う。

僕がずっと言わないと決めてた決定的な理由を、たったの一言ずつ
であっさりと吹き飛ばしてしまった。

「なーんだ、俺ずっとつき合えないってわかってるから言わないん
だと思っただ」

「俺も」

「あっはっはっは」

あっはっはっはじゃねーよ…

思いつきり疲れた僕を前に、なんだかだんだん笑いがエスカレート
していくバカども。

「あははははは、あー…腹いてー…」

「あー、涙出てきた…もう何がおかしーんだかわかんねーよ」

「俺も。何で笑ってたんだっけ」

…バカ…

ひとしきり笑い終わるといきなりアツが僕に話をふった。

「で、どうすんだよ」

「いや、だから…」

「ってゆーか、秋名せんせーはノーマークのやつから好きだって言われて嫌がるような人じゃねーだろ」

「お前、困らすだの迷惑かけるだの言って逃げてるだけなんじゃねーの？」

また痛いところをズバリとつかれる。

逃げてるだけ。

…確かにその通りなのかも、知れない。

何も言えないでいると、拓が急にまじめな顔になって僕の目を見つめた。

「りょーたあ、俺はお前に俺みたくなつて欲しくねーんだよ」

…かつて拓がこんなに真剣な目をしてたことがあつただろうか。
バ力なことしかないし、言わないやつなのに。

……

…あー…

…あー、もう…

「……………わかったよ」

「おおっ!!」

「わかったか!!」

観念して、言うつと。

バ力ふたりは、心の底からうれしそうに目を輝かせた。

「拓っ、今日はりょーたがオトコになるぞ!」

「おう、しかもオトコはオトコでも『漢』と書いて『おとこ』と読

むほうのな「!」

.....。

やっぱり、いついつは面白がってるだけなんじゃないだろうか？

最終話 先生と僕

本当は、僕は。

やっぱり伝えなかったんじゃないだろうか。

渡せるものなんて、何も思いつかないから。

せめて、自分がいたことを、いることを、心の中に留めておいても
られれば。

秋名先生の最後の授業も終わった。
もうすでに帰りの会。

いつものように笑っているけど、秋名先生はなんだか元気がない。

「えっと……1ヶ月、すごく早かったです。

3年1組のみんなと過ごせて本当によかったです。ありがとうございました」

一つ一つ言葉を考えながら、でもありきたりな言葉しか思いつかない。
い。

なんとなく僕と似てる、なんて思いながら先生の一言一言を聞く。
学級委員ふたりが、すっと教室を抜ける。

秋名先生はきゅっと口を結んで、うつむいている。

倉沢先生が「今日で秋名先生は最後です」みたいな感じでしゃべる。

こんなに集中して倉沢先生の話をみんなが聞いているのは初めてなんじゃないだろうか。

しばらくして、学級委員のふたりが戻ってきた。

ひとりとは色紙、もうひとりは大きな花束を持って。

「ええっ?…」

情けない声を出して、先生が口元を押さえる。

目からは大粒の涙が次々と、ぼろぼろあふれてくる。

やっとのことで色紙と花束を受け取り、先生は顔を上げられなくなってしまうた。

「ほんととここで『聞こえる』かなんか歌えるといいけどな」

「あつ、うん！歌おう歌おう」

倉沢先生の一言で、今文化祭に向けて練習中の課題曲を歌うことになった。

机をガッツと下げて、簡単に床を掃いて。

みんながここまでテキパキしてるのを見たことがなかった。

…だけど、まあ、僕自身も今までで一番テキパキしてたと思う。

秋名先生はずっとどうしようって顔をして、涙を流しながらなぜか困ってた。

準備が3分ほどで整い、みんなが真剣な表情になる。

今まで散々バカなことばっかやってた拓も、アツも、そして僕も。

いっつもうるさい女子も、こういうときはとてもきれいな表情になる。

みんなが指揮者に集中する。

先生の涙はずっと止まらなかった。

僕たちの歌は今までで一番きれいに響いた。

「…よしっ、りょーたしっかりやれよ」

「最後の一迷惑だぞ」

「…う、うん」

5時55分まで、拓とアツは教室に残ってくれた。
それで、ここからは僕一人で待つように言われた。

…やっぱり帰ろうかな…

時計の針が進むのが、速いような遅いような。

僕は意味もなく机の中を整理したりして、緊張を必死に解こうとしていた。

…ふと、僕の目にはあるものが目に留まった。
理科の、ワーク…

あの時、先生は泣いてた。

それは、間違いない。

泣きながら授業の準備をしてた。

がむしゃらに、何かを考えないようにしている、みたいに…見えた。

…あれは、なんだっただろう。

「あつ、菅谷くん」

もう涙もすっかり乾いた秋名先生が来たのは、僕がそうやって理科のワークをばらばらやってた時だった。

「菅谷くん、斐川くんどこにいるか知ってる？なんか呼ばれたんだけど…」

「ああー、アツだったらもう帰っちゃいましたよ」

「えっ？あれ…？」

秋名先生は、ただ「来い」と言われただけで、ほんとに何も知らされてないみたいだ。

困った顔で「どうしよう…」とか言いながらその辺の机をちよつと直したりなんかしてる。

「先生」

「んー？」

「あんどき、何で泣いてたんすか？」

あつ。

やべ…

聞くつもりなんかなかったのに。

無意識って怖い…

「あんどきつて、あんどき？」

「あ、あの…話したくなかったらいいんですけど」

「うつん、…あんどきはねー…ちよつと落ち込んだた」

秋名先生は少し恥ずかしそうに笑った。

「なんか、みんなと話してるときはすつごく楽しかったんだけど、授業になると頭真っ白になっちゃってさ。

谷中先生にもけっこういろんなことたたかかれちゃってて。

それで、落ち込みながら次のところの準備してたときだったから

…」

…あの、クソババア。

やっぱり秋名先生のコトいびってたんだ。

「でも、ありがとう菅谷くん」

「はい!？」

勝手に谷中先生に向かって怒ってたら、いきなりお礼を言われて。感謝することはあっても、されることなんか全然ないと思ってたからびっくりして変な声を出してしまった。

「すつごくタイミングよかったんだよね、菅谷くんの言葉が」

「えっ、俺なんか言いましたっけ？」

「うん、私の授業面白いつて言ってくれて」

「あ、あー……」

なるほど。

やっと、わかった。

あのときの先生の涙の理由。

「……俺、好きですよ。先生のこと」

「……え？」

「……あ……」

……口から言葉が勝手に出てきて、言うてから我に返った。

先生はすごくびっくりしてて、大きくて澄んだ目で見つめられるとかなり焦ってしまった。

だけど、言ってしまったものは仕方がなくて。
僕はとりあえず深呼吸をして。

「いや、すみません、困らせるつもりとかじゃなくて…、先生とい
て、すごく楽しかったから」

「……………」

「だから、もう会えなくなるなら、最後に言っとこうと思って…」
「……………」

先生の大きく見開いた茶色い目の中で、僕がかっこ悪く焦っている。
いつもふんわり微笑んでいるピンクの唇が、今はかたく閉ざされて
いる。

やっぱり困らせてしまった。

…言わなきゃよかったのかも…

そんなことを考えて、僕はいつの間にかうつむいてしまっていた。
軽く握った自分の手が見える。

…と、その僕の手に白い手が重なった。

「……………ありがとう。菅谷くんのこと、絶対忘れない」

秋名先生の実習が終わって、もう1週間たつ。
週の初めはやっぱり、少し…いや、かなりさみしかったけど。
少しずつ、先生のいない日々慣れつつある。

ものつすごいかつこ悪いんだけど、僕は土日ずっと熱を出して寝込んでしまっていた。

原因は…わかりきってる。

電話にも出られない状態だったから、拓にもアツにも報告することはできず。

…それをどんな意味としてとらえたのか知らないけど、今日になるまでふたりは何も聞いてこなかった。

「りょーたよお…それで、お前は『漢』になれたのか？」

さも言いつらそうにこんなことを言ってきたアツに、僕は笑った。

「『絶対忘れない』との言葉をいただきましたよ」

「おおーっ!!」

「漢だーーーー!!!」

僕の言葉に、心底うれしそうに顔を輝かせる拓とアツ。

…ほんつとバカだ。
こいつらが友達でよかった。

最初の日と最後の日に、僕は秋名先生から『絶対忘れない』って言葉をもらったわけだけど。
最初と最後じゃ、『絶対忘れない』理由が秋名先生にとっても変わっていて欲しい。

僕は、今まで高校とか将来の目標なんかがとてもあやふやだったけど。

なんか、なんとなく、教師を目指そうかなーなんて考えるようになった自分がある。

…国語では、ないだろうけど。苦手だから。

あの時見つめた、先生の大きくて茶色い目。

あの時握った、意外と小さな、白く柔らかい手の感触。

僕は絶対忘れない。

もう会えなくなるって言うてはいるけど、会うのが難しくなるだけで絶対会えないわけじゃない。

先生は大学生で、僕は中学生で。早生まれの先生だけど、年は5つも離れてて。

だけど、同じ時間の中を生きているのだから。

また、いつか。

そしたら、その時はきっと。

僕はまた笑顔で秋名先生に会うことができるだろう。

最終話 先生と僕（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます（^^）読みづらい部分も多々あったと思いますが、感想をいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5204c/>

先生と僕

2010年10月10日01時29分発行